1. 夏祭深川不動

一

旧暦４月、初夏――。

坂崎磐音は深川六間堀の金兵衛長屋で蒸し暑い日を過ごしていた。

親友二人を失った明和九年の夏から一年が経とうとしていた。

気温が上がったせいか、鰻割きの仕事は忙しかった。

磐音は毎朝七つ半に、北の橋詰の鰻屋宮戸川にかよってひたすら鰻と格闘していた。

二月ほど前、日当が七十文から百文に値上がりした。そのせいでなんとか暮らしが立っていた。だが、このところ纏まった金が入る仕事はなかった。

この朝、磐音は宮戸川の仕事の帰りに、貧乏御家人の次男坊、品川柳次郎を北割下水の拝領屋敷に尋ねた。拝領屋敷に尋ねた。

拝領屋敷といえば聞こえがいいが、何十年と手入れもされていない壊れかけた屋敷だ。それでも御家人のこと、敷地は二百坪ほどおｎ広さがあった。

この辺りの御家人の屋敷では庭を畑にして季節の野菜などを植え、家計の助けにしていた。品川家でも御多分にもれず、青菜や茄子などを栽培していた。

「坂崎さんか」

畑に水を撒いていた柳次郎が、首に巻いた手拭いで額の汗を拭きながら振り見た。

「何ぞ仕事はありましたか」

「近頃、何もありませんね。口が干し上がってどうしようもない」

「この暑さでは、どこもがうんざりしていますからね」

「暑気払いに一杯といきたいが、あいにく銭の持ちあわせもない。またにしましょうか」

しばらく雑談した磐音は柳次郎に分かれを告げると、深川六間堀の金兵衛長屋に戻った。

九尺二間の長屋には温気が充満していた。

磐音は狭い裏庭の障子を開けると風を入れた。

水甕を除き、米櫃を確かめた。

かさりと底に残っているだけだ。

「なんとかしなければ」

独り言を呟きながら、残った米を釜に移した。井戸端に持って行こうと立ち上がったとき、戸口に誰かがった気配がした。

顔を上げると、富岡八幡宮前で金貸しとやくざを二枚看板にした権造一家の代貸の五郎造と視線が合った。

「五郎造どのか、暑いな」

「親分かお呼びだぜ」

「そういえば親分には借りがあったな」

「覚えていたとは殊勝なこった」

五郎造がにやりと笑った。

「暫し待ってはもらえぬか。腹が減って戦はできぬと申すでな」

「ちぇっ。このくそ暑いのに、大の男が飯を炊くのを待てるけえ。飯ぐれえ、うちに来ればたらふく食わせてやるぜ」

「きょうか。仕度をいたすゆえ、しばらく門前でお待ちあれ」

「おめえさんと話してると日が暮れるぜ。早くしねえ」

磐音は五郎造を待たせ、備前包平二尺七寸と無銘の脇差一尺七寸三分を腰に差し落とした。それで仕度はできた。

六間堀町から富岡八幡宮まで五郎蔵と肩を並べて歩きながら、磐音は訊いた。

「親分の頼みごとはなにかな」

ひと月前、鰻捕りの幸吉が泥龜の米次に拐かされたことがあった。

そのとき、権造親分の手を借りて幸吉の行方を探したのだ。その返礼に、磐音は一度だけ剣の腕を貸す約束をしていた。

その取り立てに五郎造がきたのだ。

「おめえさんは深川不動が知っているけえ」

「前を通ったことはあるが、参拝したことはござらぬ」

「ござらぬときたか。あそこはうちの稼ぎ場だ」

深川不動は、元禄十六年に成田山が永代寺の門前を借りて、不動尊の出開帳をした時に始まる。以来しばしば、成田山新勝寺をはじめ、出開帳で人を集めていた。単に不動堂とも呼ばれて、地元の者に親しまれていた。

「深川不動の夏祭りは、うちの親分と川向うは浅草黒船町の勝八親分が交互に仕切る習わしになっていた。ところが、つい２日前、深川不動に打ち合わせに行ったと思いねえ。するとよ、顎の勝八の所から子分どもが来て、相談は済んだというじゃねえか。なんて話だってんで、親分とおれと黒船町に乗り込んだってわけだ。すると顎の野郎め、今年の夏祭りが深川不動はうちで仕切らせてもらうぜって、ふざけたことを抜かしやがる。親分が怒りなさって、顎、てめえはおれに喧嘩を売る気かと怒鳴りなさったが、顎の野郎、平気の平座でよ。ああ、そういうことだってぬかしやがったのさ。おれも親分も腸が煮えくりかえったが、浪人者まで出てきやがって、多勢に無勢だ。そんときは堪えに堪えて橋を渡って戻ってきたってわけだ。売られた喧嘩だ、こっちも人手を集めて出入りの仕度を始めた。ところが、昨日のことだ、うちの関わりの櫓下の女郎屋に五人の浪人者が上がって、遊女を揚げて盛大に飲み食いしたあげく、朝方、勘定が欲しければ顎の勝八親分に請求しろといったというじゃねえか。そいつを聞いた親分がかんかんに怒りなさってよ、子分を差し向けたと思いねえ。ところが浪人どもは腕に覚えがある野郎どもで、散々な目に遭わされてよ、四人が手足に怪我をして、医者の所に担ぎこまれたってわけだ。」

話の目処（めど）がついた頃、磐音と五郎造は、富岡八幡宮前の権造一家の戸口の前に辿り着いていた。

一家は殺伐とした重い空気に囲まれていた。奥座敷には喧嘩仕度の子分たちが控えている気配だ。

磐音は始めて権造の居間に通された。

多きな神棚の前の長火鉢には、派手な浴衣の権造がでんと座り、苦虫を噛み潰したような顔で磐音を迎えた。

「おめえさんに貸しがあったな」

「五郎造どのにも同じことを言われた。親分、念を押すまでもない」

「話は聞いたか」

「浪人五人にただで飲み食いされたようだな」

「飲み食いばかりか、子分四人が使いものにならねえ。金もさることながら、おれの面子が立たねえや。このままじゃあ、稼業にも差し障りがあらあ」

「顎の親分とはこれまで仲良くやってきたと聞いたが、急に何が起こったのかな」

「そこだ。顎の勝八は元々黒船町の先代の代貸だった男だが、先代が去年の暮れに急死しなすったあと、姉さんを誑し込んでよ、跡目を継いだんだ。先代は仲間とも町奉行所ともうまくやっていたもんで、顎の野郎には北町の臨時廻り同心がついていやがる。定廻り同心を長年務めた月形彦九郎という男だ。こいつは寺社方とも仲がいい。こいつの力を借りて、顎の野郎は川のこっちにも縄張りを広げてきてやがるんでえ」

「親分、顎の一家には何人も浪人者がいるという話ではないか。そいつらも月形どのの手下かな」

「浪人の頭領は、深甚流とかいう剣術の達人飯岡一郎助でよ、顎一家の近くに町道場を開いている三十五、六の大男だ。こいつの所に食い詰め浪人がごろごろしてるのさ。うちの関わりの見世で飲み食いしやがったのもこいつらだ」

「浪人どもは別にして、北町の同心どのが厄介だな」

「なんぞ知恵を働かせてくれ。おめえには貸しがあるんだからな」

「親分、そう何度も貸し貸しと言わんでもらいたい。それがしもこうして顔を出しておるのだ。十分、相談には乗るつもりだ」

言わねは考える素振りを見せた。

「親分、北町同心の始末はそれがしにまかせてくれ。少々時間が架かるやもしれぬがな」

「おめえさん、安請け合いしていいのけえ」

言わねには考えがあった。だが、そう易易と権造に話すつもりはない。腹をすかせた仲間がほかに二人もいるのだ。

「今年の夏祭りはなんとしてもうちで仕切る。祭りまでには３日をきってるが、それまでには決着をつけてえ」

「まかせてもらおう。まずは深甚流の用心棒の退治から取りかかろうか。その前に二つばかり相談だ。いささか腕に覚えがあっても、大勢の浪人相手に某一人で獅子奮迅の働きはできぬ。そこで二人ばかり助太刀を頼もうと思うが、よいかな」

「二人だと。仕方あるめえ」

「某はただ働きでかまわぬが、助太刀を頼む以上、仲間はそうはいくまい」

「仕方あるめえ、二人は一日一両でどうだ」

「今一つ、それがし、腹をすかせておる。飯を馳走してくれぬか」

「呆れた野郎だぜ。五郎造、台所でなんぞ食わせてやれ」

そう命じた権造はどこかほっと安堵の色を見せた。

蛸のさくら煮、牛蒡、人参、蒟蒻、椎茸などの野菜と、鶏を炊き合わせたものなど、金貸しとやくざの稼業はなかなかの繁盛とみえる。

「おまえさん、よく食うな」

満足げな表情で茶を飲む磐音を見て、中年の勝手女中のおかつがびっくりした顔で行言った。

「味付けが実に結構でござった。母上の料理とよく似ておりました」

女中は笑みを浮かべた。

「おまえさんのおっ母さんはどこにおられるだね」

「江戸から二百六十余里も離れた西国でござる」

「江戸で腹を減らしてると知れば、心配もされようが。おまえさんも、ちったあ性根を入れて働かねばなんねえぞ」

女中は磐音に説教を垂れた。

「そうじゃな、いつまでも心配をかけてはならぬな」